《研究ノート》

ルソー生誕二五〇年*

附・若干の研究文献

宇津木正

一九六二年〔六月二八日〕はルソー生誕二五〇年であった。そして同時に『社会契約』〔五月〕と『エミール』〔六月〕の出版二〇〇年でもあった。世界の各地で、それらを記念するために講演会・展覧会・記念出版が行われた[1]。新聞・雑誌は特集号を発行した[2]。

以下フランスとスイスにおける記念行事について記す。

一九六一年に、雑誌 *Europe* はその一一・一二月号でルソー特集号[3]を発行し、フランスが公けに二五〇年の記念祭典を開くことを主張した。雑誌 *La Pensée* も Georges Cogniot の講演会を予告した[4]。

フランスでは一九六二年の春から秋にかけて記念祭典を開くため、全国委員会がつくられた[5]。スイスの委員会も Genève, Neuchâtel, Berne における記念祭典を準備した。

一九六二年二月二一日パリにおいて *La Pensée* 主催の講演会が開かれた[6]。講師は Cogniot、演題は『ルソーと自由』であった。

五月三・四・五日には、Dijon 大学の法学部と文学部の共同主催のもとに『社会契約』にかんする研究報告会が開かれ、フランス・スイス・イギリス・ベルギー・ドイツ・イタリー等の学者たちによって三〇の多面的な報告が行われた[7]。

この会議の模様を Pierre Grosclaude が *Le Monde* (1962—5—10) に寄稿している。要約すれば、そこではルソーにおける「自由の問題」が歴史的に、思想史的に、理論的に議論されたのである。その核心は、『社会契約』の基調を自由と考える Bruxelles の Schmid 氏、《最高の自由の弁証法》を考察する Dijon 大学法学部長 Dehaussy 氏、ルソーの Cité の虚構と真実を示すパリ大学法学部教授 Eisenmann 氏、Strasbourg の de Soto 氏、Nancy 大学の Derathé 氏、などの報告であった。また、ルソーの思想のジャコバン主義との、あるいは社会主義との関係も考察され、Messine 大学教授 Della Volpe[8] 氏はルソーのマルクス主義的評論を行なった。

六月二八日—七月三日〔七月二日はルソー死去の日〕の六日間、「Royaumont の僧院の青葉と静寂を背景にして」、ユネスコ・フランス委員会主催の研究・討論会議が開かれた。この会議は、フランスのルソー協会 (Association Jean-Jacques Rousseau) の事務局長 Maxime Nemo 氏によって主宰され、参加者はフランス・スイス・ソ連・ルーマニア・ノールウェー・アメリカ・日本・タオメー（黒人アフリカ）・イタリー等等にわたった。会議の主題は「ルソーと現代人」で、いわばルソー思想の現代世界への延長を論議したのであった。

Le Monde (1962—7—11) への Grosclaude の寄稿によれ

ば、この会議では、科学と技術・政治学説・社会思想・教育思想・人間と自然との関係・言語と口頭の伝達の問題・等々の諸命題が《ルソーにおいて》、《現代において》考察された。特筆さるべき点は、マルクス主義者とアジア・アフリカを含む外国研究者の参加である。ソ連科学アカデミー通信会員 Michel Dynnik 教授は、現代の《進歩的ヒューマニストたち》はルソーのなかにその偉大な先駆者を確認したと断言し、ソ連においてはルソーの著作は不断に《活気を与える》ものであると証言した。桑原武夫教授の黄宗羲・安藤昌益・中江兆民にかんする報告は特に注目を集めた。また、Dahomey の大学人 Aguessy は、アフリカの知的青年がルソーとフランス一八世紀の遺産をきわめて重視していると語った。

同様に、六月から七月にかけて Genève では、講演会・研究報告会・映画・展覧会・演劇等[9]、いろいろの記念行事が行われた。Genève の労働者大学は、文学部と共同して研究報告会を主催した。祭典が最高頂に達した六月二八日には、Genève 共和国文部大臣主宰の講演会が「宗教改革の広間」で行われた。講演者はスイスのルソー協会 (Société Jean-Jacques Rousseau) 会長Marcel Raymond 教授、Académie française の Jean Guéhenno 氏などである。これらの研究報告・講演は後に出版された。文献〔17〕

一〇月一一日 *La Pensée* は Genève において、パリと同じ講師、同じ演題で講演会を開いた。

一〇月一六日―一九日には、「全国委員会」主催のルソーとその著作にかんする討論会議が、Collège de France で開かれた。Collège de France 教授 Pommier 氏が開会演説を、ソルボンヌの教授 Fabre 氏が閉会演説をした。第一日には人間ルソーについて、第二日には哲学的・教育学的問題について、第三日には政治学的問題について討論された。最後の夜には Fabre 教授の講演が行われ、その後で、ルソーのオペラ数曲が Roger Cotte と Jacques Chailley の指揮で演奏された[10]。

一九六二年の終りに Bibliothèque nationale はルソー展覧会を「かつてそうであったとおりに」「現在そうであるままに」開いた。文献〔18〕

* * *

一八七八年に、フランスはルソー死後一〇〇年祭を公けに開催しようと準備したが、伝統主義者たちの反対にうち勝つことはできなかった。ただ Louis Blanc が、《一八世紀における人民の代表者》であり、《国王に反対》し、《聖職者に反対》し、《産業の独占者に反対》するルソーを記念して講演会を開いた。(その年の五月 Voltaire 死後一〇〇年祭がパリの Théâtre de la Gaieté で盛大に行われたのに……。しかしその時、V. Hugo はその祝辞のなかで《偉大なる三人》Diderot, Voltaire, Rousseau について述べた。)

一九一二年にはフランスはルソー生誕二〇〇年を公けに祝うことができた。しかしこれは L'Action français (L. Daudet, Ch. Maurras) の烈しい反動的攻撃を引き起したのであった。

一九六二年の春秋にわたった盛大な記念祝典は、全国的・国際的に行われ、かつてのような反動は影をひそめ[11]、現代のルソー研究が、五〇年前には想像もできなかったような多面性・多様性をもっていることを示した。それはマルクス主義的・実存主義的・精神分析的研究の展開である。そしてその底には人間変革・社会変革の息吹きが流れているように感ぜられる。そして、この二つの変革の統一的把握のなかに現在のルソー研究の課題があるように思われる。

＊　この記事を書くために多くの友人の援助をえた。特に、三菱経済研究所の池田重隆氏からはスイスの新聞の特集記事の教示をうけ、さらに *Le Monde* 一九六二年一年分を見せていただいた。同僚津田内匠氏からもイタリア、ソ連の出版状況その他について教示をうけた。また、研究文献の入手については、竹内書店の池田豊氏と岡見純氏に、いつものことながら、特別の配慮をいただいた。心からの感謝をもって記す。

（1）　日本では、一一月一一日に高松市で、経済学史学会がシンポジューム「ルソーをめぐって」を、一一月一六日に京都で、京都大学人文科学研究所が記念講演会を、開催した。

（2）　たとえば、*Neue Zürcher Zeitung* (1962—6—12) や *Annales historiques de la Révolution française* (No 4, oct.-déc. 1962) や『法学新報』（第六九巻第一〇号）などをあげることができる。

Neue Zürcher Zeitung には Hans Barth, "Ueber die Dialektik zwischen der Volonté générale und der Volonté particulière"; Leo Weisz, "Der 《Contrat social》 in Ungarn"; Max Nänny, "Rousseau im Gespräch mit Boswell" などがある。またその新聞の記事によると、*Musées de Genève* の六月号もルソー特集号であって、そこには Marcel Raymond, "Rousseau et la connaissance de soi"; E. Dottrens, "Rousseau et les sciences de la nature au 18e siècle"; Samuel Baud-Bovy, "Rousseau musicien" のほか、ルソーを《le plus ethnographe des philosophes》とする Georges Lobsiger の論文、現代教育にたいする貢献を論ずる Charles Baehni の論文、《Iconographie populaire de Rousseau》についての Paul Rousset の記述、などが含まれている。*Annales historiques*……には、M. Launay と J. Nicolas のルソーの未刊の書簡についての解説、A. Soboul, "Classes populaires et rousseauisme sous la Révolution"; C. Mazauric, "Le rousseauisme de Babeuf"; J. Dautry, "Saint-Simon et J.-J. Rousseau" のほか、ルソーの国際的な影響についての、S. R. Ghibaudi（イタリー）、B. Leśnodorski（ポーランド）、M. Strange（ロシア）、R. R. Palmer（アメリカ）の研究が掲載されている。

(3) この特集号の紹介は，*Cahiers du Communisme*, mars 1962, p. 127—132 で Hélène Henry によって，『思想』一九六二年六月号で河野健二氏によって，行われている。

(4) *La Pensée*, No 100, nov.-déc. 1961, p. 91.

(5) 名誉会長は学士院会員 Jean Pommier 氏，会長はソルボンヌの教授 Jean Fabre 氏，委員はルソー研究者である文学界・学界のすぐれたひとびと約四〇人である。

(6) これは *La Pensée*, No 105, sep.-oct. 1962, p. 27—54. に掲載されている。

(7) ルソーについての著書が二つある。一九六一年に *Malesherbes, temoin et interprète de son temps*, pp. xvi, 806. という記念碑的研究を出版した。

(8) 著書の一つに *Rousseau e Marx, e altri saggi di critica materialistica*, 1957, pp. 162. がある。

(9) 《Duvin du village》と《Muses galantes》である。

(10) *Europe*. Jan.-fév. 1963, p. 334—351. にこの会議の紹介記事が出ている。

(11) もちろん報告者，講演者のうちにはルソーの現代的意味を否定する論者もいた。*Le Monde* (1962—7—14) が，かたすみに，ルソー二五〇年祭とパスカル〔死後〕三〇〇年祭のために，《M. Barres の生誕一〇〇年祭は少々影がうすくなっている》と述べているのは象徴的である。

附・若干の研究文献

〔ここで取りあげた文献は，1961—1963 年に出版された著書のうち，私の調べたものだけで，雑誌論文は含めない。ページ数の記入されているものは，書物にもとづいて確認したもので，記入のないものは確認してない。〕

I. Edition.

1. 全集・著作集・選集

〔1〕 *Oeuvres complètes*. II. La nouvelle Héloïse, Théatre, Poésies, Essais littéraires. Ed. publiée sous la direction de Bernard Gagnebin et Marcel Raymond. Paris, 1961, pp. cii, 1999. [Bibliothèque de la Pléiade]

〔第一巻は 1959 年に出版され『告白』『対話』『夢想』を含み，全部で五巻になる予定。『新エロイーズ』のテキストは B. Guyon の注釈にもとづき H. Coulet がつくり，演劇関係のものは J. Scherer が，その他は Ch. Guyot が担当した。Guyon のその生成と意味についての研究は注目さるべきものである。〕

〔2〕 Руссо, Жан-Жак, Избранные сочинения. Том I. Москва, 1961, стр. 851.

〔これは三巻の『著作集』の一冊であって，第一巻には И. Верцман の序文（7—38 ページ）と，『学問芸術論』

『ダランベールへの手紙』『言語起源論』『気まぐれ女王』『ナルシス』『村の占者』『フランス音楽についての手紙』『エミール』等々，芸術論・文学論・詩・演劇・教育小説にかんするものが含まれている。「三冊本の選集が発行された。しかしこの一〇万部はすぐに売切れたという。」(桑原編『ルソー』岩波新書)〕

〔3〕 *The political writings of Jean Jacques Rousseau,* edited.....with Introduction & notes by C. E. Vaughan. 2 vols. Oxford, 1962, pp. xxi, 516; 577.

〔1915 年の初版の Reprint。〕

〔4〕 *Choix de textes de Rousseau, par M. Nemo.* Préf. de Jean Fabre. Paris, 1962, pp. 200.

〔ルソーにおける恋愛者・小説家・立法者・教育者・孤独者を示すことに成功している。〕

〔5〕 *A la rencontre de J.-J. Rousseau.* Textes et documents réunis par Bernard Gagnebin. Genève, 1962, pp. 78.

〔ルソーがもっともよく自己を描いた文章を選び，肖像画・原稿の写真版・風景の写真版によって飾られた，この書物はもっとも優美な記念出版物である。〕

〔6〕 *Le roman de Jean-Jacques.* Recit d'Andre Dhôtel. Paris, 1962, pp. 257.

〔ルソーの正確で生気のある生涯を，彼自身の書きものの抜き書きによって示す。多くの写真が挿入されている。〕

2. 著作

〔7〕 *Emile ou de l'éducation.* Introduction, bibliographie, notes, et index analytique par François et Pierre Richard. Paris, 1961, pp. 1, 665. 〔Classiques Garnier〕

〔8〕 *Lettres sur la botanique par J.-J. Rousseau,* présentées par Bernard Gagnebin, suivies du Fragment de dictionnaire des termes en usage en botanique, préfacé et annoté par Ernest J. Bonnot. 1962, pp. xxv, 303.

〔序文に B. Gagnebin, "Rousseau et la botanique" がある。〕

〔9〕 *Lettres ecrites de la montagne,* avec une préface de Henri Guillemin. Neuchâtel, 1962, pp. 303.

〔Guillemin の序文は，イエスの側に立つことを許さなかった彼の敵によって追求されたルソーのなかに真のキリスト教を見る。そして貴族が既成秩序の敵と考え，新教牧師が異端者とした，ルソーを圧しつぶすための陰謀のなかでの Voltaire の役割を明白に示す。〕

〔10〕 *Rousseau juge de Jean Jacques. Dialogues.* Texte présenté par Michel Foucault. Paris, 1962, pp. xxiv, 336.

〔11〕 *Les confessions.* Cette édition publiée pour le 250e

anniversaire de la naissance de J.-J. Rousseau est préfacée et annotée par J.-L. Lecercle. Paris, 1962, pp. xliv, 635.

〔「進歩的書物の友の会」によってルソーに捧げられた édition。Lecercle は，Genève 原稿とも最終原稿ともちがう，Neuchâtel 原稿にもとづいてこの版をつくった。Lecercle の序文はルソーについての広汎な研究であって，ルソーが下層階級に属するという批判的分析は注目さるべきである。《文学者は三つの誓をたてなければならない。貧乏・自由・真理を。》〕

〔12〕 *Il contratto sociale.* 1961. (Cirana)

〔13〕 *Il contratto sociale.* 5a ed. 1961. (Einaudi)

〔14〕 *Il contratto sociale.* 1962. (Rizzoli)

〔15〕 *Contratto sociale,* a cura di G. Ambrosetti. 1962. (La Scuola)

II. Références.

〔16〕 Асмус, В. Ф., Жан-Жак Руссо (К 250-летию со дня рождения). Москва, 1962, pp. 48. 〔II серия, философия, 1962, No. 11〕

〔17〕 Baud-Bovy, Samuel, Claude Lévi-Strauss, Robert Derathé, Marcel Raymond, Robert Dottrens, Jean Rousset, Bernard Gagnebin, René Schaerer, Jean Guéhenno, Jean Starobinski, Charly Guyot, et S. Stelling-Michaud, *Jean-Jacques Rousseau.* Neuchâtel,1962, pp. 262.

〔《労働者・主婦・文学者・使用人・公務員・学生・教授などが隣り合った満員の広間で》スイスとフランスの学者や賢人たちの行ったルソーの生涯と思想の多面的な研究報告。〕

〔18〕 Bibliothèque nationale, *Jean-Jacques Rousseau, 1712—1778.* Préf. de J. Cain. (Exposition Roussean 1962)

〔19〕 Bocquillon, Emile, *J.-J. Rousseau, ce méconnu.* Paris, 1962, pp. 106.

〔20〕 Boyd, W., *Educational theory of J.-J. Rousseau.* 1963. (Russell & Russell) (1911 年の翻刻版)

〔21〕 Bretonneau, G., *Valeurs humaines de J.-J. Rousseau.* Paris, 1961, pp. 307.

〔これはソルボンヌに提出された博士論文。ルソーの精神と心情についての，ルソーの思想と作品の教育的価値についての，独創的な考察。〕

〔22〕 Broome, J. H., *Rousseau, a study of his thought.* London, 1963, pp. 231.

〔23〕 Burgelin, Pierre, *Jean-Jacques Rousseau et la religion de Genève.* Genève, 1962, pp. 61.

〔ルソーの宗教思想は相矛盾する多くの解釈を生んだが，著者は長年のルソー研究にもとづき，ルソーの多様な意図とルソーの基本的な目標との統一を試みた。〕

〔24〕 Château Jean, *J.-J. Rousseau: sa philosophie de l'éducation.* Paris, 1962, pp. 254.

〔25〕 Eigeldinger, Marc, *J.-J. Rousseau et la réalité de l'imaginaire.* Neuchâtel, 1962, pp. 213.

〔ルソーの思想の多様性あるいは混乱そのものを統一総合しようと試みている。その中心概念はルソーが直観的に確信している想像的世界の現実性である。そして想像力の解放，想像力と行動の関係が歴史的に考察されている。〕

〔26〕 Endore, Guy, *The heart and the mind.. The story of Rousseau and Voltaire.* London, 1962, pp. 360.

〔27〕 Ghibaudi, Silvia Rota, *La fortuna di Rousseau in Italia (1750—1815).* Torino, 1961, pp. 373.

〔ルソーの政治思想のイタリーへの普及の歴史的研究。〕

〔28〕 Grimsley, Ronald, *J.-J. Rousseau: a study in self-awareness.* Cardiff, 1961, pp. 338.

〔ルソーの内面生活の展開を，自伝的書きものと手紙類にもとづいて，心理学的・精神病学的概念によって考察している。〕

〔29〕 Guyot, Charly, *Plaidoyer pour Thérèse Levasseur.* Neuchâtel, 1962, pp. 203.

〔Thérèse については，《意地悪女》《醜い魔女》《不品行な百姓女》などといろいろ言われている。『告白』や手紙のなかのルソーの言葉を集めて，彼女を客観的に示すことによって弁護論を展開している。〕

〔30〕 Imboden, M., *Rousseau und die Demokratie.* 1963. (Mohr)

〔31〕 Jost, François, *J.-J. Rousseau suisse. Etude sur sa personnalité et sa pensée.* 2 vol. Fribourg, 1961, pp. viii, 445; 458.

〔ルソーの helvétisme (スイスへの愛着) を事こまかに調査した研究。小地区の共和主義的愛国心，信心深い道徳心，自然についての感情，特にアルプスの山の美しさや湖の魅力についての感情のなかに，それを見る。Jost はスイス人の特性として憶病さ，不安な内向性をあげ，それが告白や内心の日記を愛好させるとする。それはチュリッヒのひと Keller，ジュネーヴのひと Amiel，ヴォーのひと Constant のなかにも認められるとする。〕

〔32〕 Jost, François, *Rousseau et la Suisse.* Neuchâtel, 1962, pp. 52.

〔観光客にルソーとスイスを紹介する書物。本文のほかに 32 葉の写真がある。〕

〔33〕 Lathion, Lucien, *J.-J. Rousseau et le Valais.* Lausanne, 1963.

〔34〕 Lebois, A., *Autour du Contrat social. Faut-il rendre à Rousseau la lettre au seul ami?* Paris, 1962, pp. 32.

〔35〕 May, Georges, *Rousseau par lui-même.* Paris, 1961, pp. 189.

〔36〕 Pfister, Anne-Marie, *Itinéraire de J.-J. Rousseau.* Préf. de J. Guéhenno. Paris, 1963, pp. viii, 106.
〔これは22葉のカラー・スライド・フィルムと，それを解説する小冊子である。〕
〔37〕 Raymond, M., *J.-J. Rousseau. La quête de soi et la rêverie.* 1963. (J. Corti)
〔38〕 Vossler, Otto, *Rousseaus Freiheitslehre.* Göttingen, 1963, pp. 395.
〔39〕 Winwar, Frances, *J.-J. Rousseau: conscience of an era.* New York, 1961, pp. 366.
〔精神分析的深層心理から見た伝記。〕

(1963. 7. 2)（一橋大学助手）